

羽村市史編さんだより

令和4年7月

第30号

伸びゆくはむら

特集

古文書のかたち

今号の内容

News

資料紹介

市史編さんの足あと

コラム「ちっとんべえ」

特集

古文書のかたち



今回の特集は古文書こもんじよのかたちについて紹介します。

これまでも『羽村市史 資料編』や「伸びゆくはむら」で取り上げてきましたが、市内には多くの古文書が残されています。役所への提出物をはじめ、家業の帳簿、身近な日記や手紙、何気ないメモ書きに至るまで、その内容は多岐にわたります。

そんな古文書ですが、用途に合わせて見やすく、また扱いやすいようにと、さまざまな工夫が施されています。

◆ いろいろな「かたち」

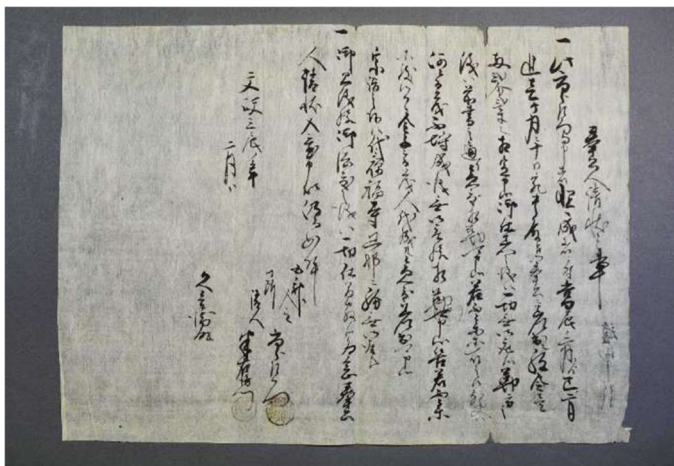
古文書の紙一枚の寸法には諸説ありますが、A3判、B4判くらいが基本とされています。それを用途ごとにかたちを変えて使用します。主な種類として、一枚文書、かんすほん巻子本、冊子などがあります。

◆ 一枚文書（一紙文書/一通物/一枚物）【図1】

名前のとおり一枚の紙です。折らずに使用する紙をたてがみ堅紙といい、そこに書かれた文書をたてがみ堅文といいます。堅紙を半分に折ったものを折紙、切り離したものを切紙といいます。

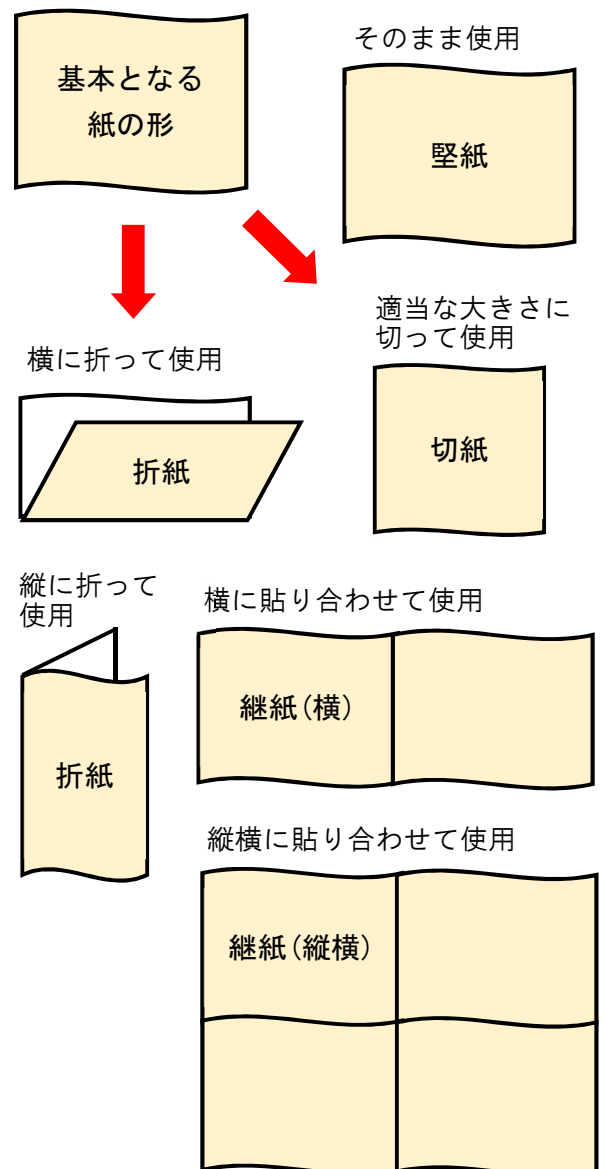
一枚で書ききれない場合は、紙を貼り合わせて使用します。横に貼り合わせたものをつぎがみ継紙といい、縦横に貼り合わせたものは絵図などに使用されます。

史料1は堅紙の一枚文書です。奉公人の身元を保証する人が、奉公先に提出したもので、奉公する日数や給金のことなどが書かれています。

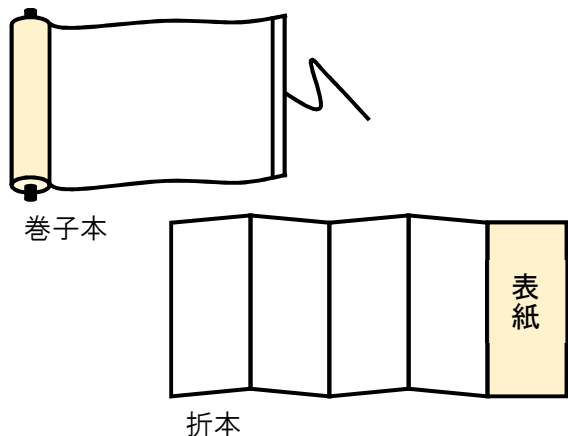


▲【史料1】奉公人請状之事

▼【図1】さまざまな一枚文書



▼【図2】卷子本と折本



◆ 卷子本（巻物）、折本【図2】

卷子本は、継紙を木の棒（軸）に巻いたもので、いわゆる巻物のことです。中国から伝来し、書物の中では最も古い形態です¹。経文²などに使用されますが、絵が描かれた物語仕立ての絵巻物もあります。

卷子本を改良したものに折本があります。卷子本から軸を外して蛇腹に折りたたみ、それに表紙を付けたものです。見たいところをさっと開くことができます。この折本は、小型化され持ち運びができるものなど、使い勝手に配慮したかたちに発展していきました。

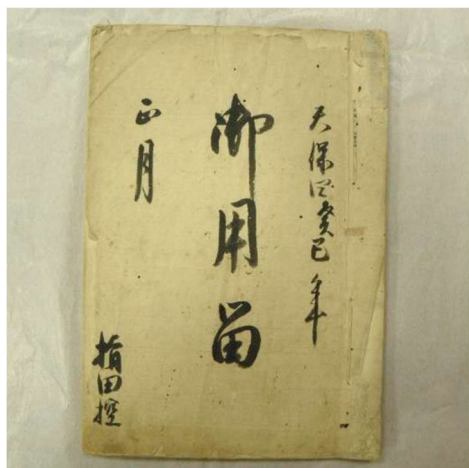
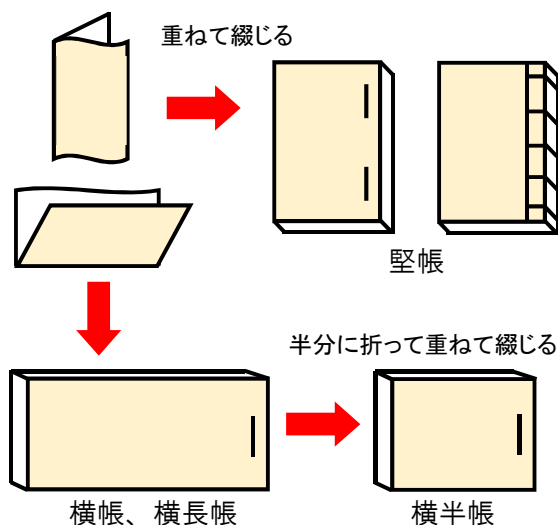
◆ 冊子【図3】

折本を改良したものに、半分に折った紙を重ねて綴じる冊子があります。主に村明細帳³など公的な文書に使われ、縦半分に折ったものは縦帳、横半分に折ったものは横帳あるいは横長帳といえます。綴じ方にもいろいろあり、糊で綴じたものは粘葉装、糸で綴じたものは列帖装（大和綴）などといえます。

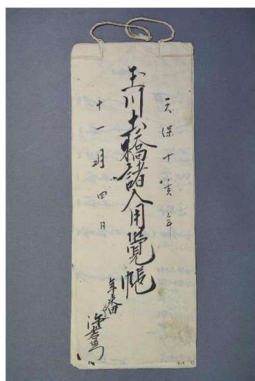
史料2は縦帳です。羽村堰の水番人が記した記録書で、職務に関わることが書かれています。

史料3は横帳です。冬季、多摩川にかける土橋に関わる諸経費が書かれています。

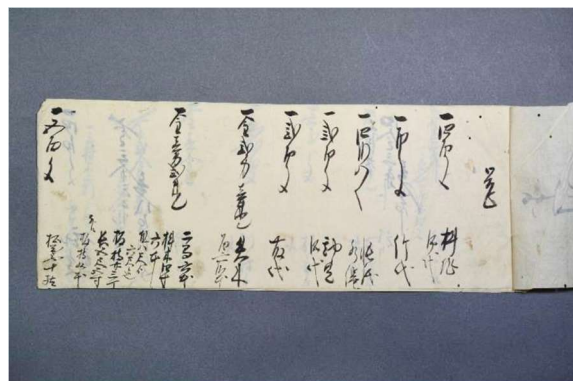
▼【図3】冊子



▲【史料2】御用留



▲【史料3】玉川土橋諸入用覚帳



このように古文書には、一枚の紙をそのまま使用するものもあれば、折ったり、切ったり、綴じたりと、用途に合わせた多様な「かたち」があります。

また、使用される紙の質も、原料に用いられる楮^{こうぞ}や雁皮^{がんぴ}などの植物によってさまざまです。

古文書を見る時には、漢文やくずし字などの文字や内容に意識が向きがちです。でも、今回のよう

にいつもと違う角度から見てみると、もっと面白く、楽しいものになるかもしれません。

- 1 橋口侯之介『和本入門 千年生きる書物の世界』平凡社、2011
- 2 仏の教えを記した文章のこと。お経。
- 3 江戸時代、領主が村のようすを把握するために村から提出させるもの。

※ 史料1～史料3 羽村市郷土博物館所蔵



News

『羽村市史 本編』の編さんを進めています

編さんを進めている『羽村市史 本編』は上下巻の2冊組みとなる予定です。現在、上巻を構成する原始・古代から近世までの通史部分と自然分野について、内容の検討を進めています。上巻に掲載する各分野の資料編は、羽村市役所総合案内と郷土博物館にて1冊2,000円で販売中です。



『羽村市史 資料編 自然』（H30 刊行）
羽村市の地形・地質や気候、動植物について約4年間にわたる調査によって収集されたデータを分析し収録しました。

『羽村市史 資料編 考古・中世補遺』（R2 刊行）
縄文時代から江戸時代までの羽村市域の代表的な遺跡や遺物を紹介しています。『中世』刊行後の調査成果を補遺として収録しています。



『羽村市史 資料編 中世』（H29 刊行）
羽村市域を含む「^{そまのぼ}杣保」一帯を支配していた三田氏などに関する史料や、市域にある石造供養塔を収録しました。

『羽村市史 資料編 近世』（H30 刊行）
江戸時代から明治時代の初めにかけての古文書や絵図を解説付きで掲載しています。新発見の史料や、初公開となる史料も収録しました。



表紙の解説

古文書のかたち

表紙の史料は、紙を重ねて紐で綴じた帳簿（下）と和綴じ本（上2冊）、背景は紙を継ぎ合わせた地図です。このように古文書はさまざまな「かたち」をしていますが、このかたちは、書く内容や使い勝手に合わせて変えていました。内容だけではなく、古文書全体にも目を向けるとさまざまなことがわかります。



表紙掲載史料：市内個人所蔵

資料紹介

今回は『羽村市史 資料編 近現代図録』から取りあげました。

「堰下での鮎釣り 昭和初期」

(『羽村市史 資料編 近現代図録』90ページ)



毎年6月に解禁される鮎釣りは、多摩川の夏の風物詩です。写真は、昭和初期の羽村堰下左岸側を写したもので、大勢の釣り人が竿を出しているのがわかります。その奥の方には投渡堰^{なげわたしぜき}があるのが見えます。腰のあたりまで川に入って釣る人、中洲で休憩する人や岸から見学する人など、たいへん賑やかな様子です。

秋になると、成熟した鮎は多摩川を下り、中下流域で産卵します。孵化^{ふか}した仔魚^{しぎよ}¹は冬の間、川よりも温かい東京湾で成長し、春になると稚魚は多摩川を遡上して、初夏にかけて若鮎へと育っていきます。

羽村市域では、堰下に集まった鮎がよく獲れ、鮎漁に適していた²ことから、江戸時代、ここで獲れた鮎は将軍への献上品にもなっていました。しかし、取水のために改良された堰の影響などによって、明治・大正期には遡上数が激減していたといえます³。

それでも昭和初期までは、羽村にも農業との兼業漁師がいたほどの漁獲量があり、鮎などの川魚を網漁や釣漁、筌漁^{うけ}で獲っていました⁴。また、羽村堰下は釣りの名所としても知られ、都心からの行楽客が多く集まりました。

堰の周辺には、鮎を名物に出す料亭や宿が何軒かあったそうです。

戦後は、水質の悪化などの人為的な環境変化が原因で、鮎は一時期多摩川から姿を消しました。その後、水質の改善や、遡上を阻害する堰などの構造物に改良が施されていくと、鮎は再び多摩川を遡上するようになり、その数を徐々に増やしています⁵。

現在は、漁業協同組合が放流している鮎とあわせて、江戸前鮎とも呼ばれる天然の鮎も釣れるようになりました。江戸前鮎が、手軽に食べられる多摩川の名物として復活する日も近いかもしれません。

1 孵化した直後の魚の幼生。稚魚の前段階。

2 西多摩村役場編『西多摩村誌』1928

3 前掲註2、加藤憲司「多摩川と東京湾を行き来するアユ—その生態と変遷—」(『多摩のあゆみ(110)』2003)

4 羽村町教育委員会『羽村町史史料集第四集 羽村町の民具』1979 p.19、はむら民俗の会・羽村市郷土博物館編『とおめがね—21世紀への贈りもの—』羽村市教育委員会、1999 p.28

筌漁は竹などでできた道具を水中に沈めて魚を捕獲する漁法。

5 前掲註3 加藤、橋本浩「多摩川の魚たち」(『多摩のあゆみ(181)』2021)



市史編さんの足あと ※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
4月	10日(日)	⑤春季例大祭調査
	15日(金)	③近現代部会会議
5月	12日(木)	①遺跡現場見学 (以降、定期的に作業進捗の確認)
	17日(火)	③⑤個人宅蔵調査
	25日(水)	⑤民俗部会会議

月	日	できごと
6月	2日(木)	③⑤個人宅蔵調査
	9日(木)	③⑤博物館作業
	16日(木) ～24日(金)	③⑤個人宅所蔵資料搬出 および クリーニング作業
	19日(日)	②近世部会会議
	28日(火)	②近世部会打合せ

「伸びゆくはむら」バックナンバーは以下の場所でご覧いただけます。

- 市史編さん室(市役所西庁舎3階)
- 羽村市図書館(3階地域資料コーナー)

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトは
コチラから



コラム

ちっとなべえ

第30回「思わぬ出会い」

夏の夕暮れになると、玄関先のガラスに薄桃色のおなかをした来訪者がへばりついていることがあります。それはヤモリ(ニホンヤモリ)です。「家守」「守宮」とも書き、夏の季語になっている生き物です。

先日、市内の石蔵を調査していた時のこと、古文書の間からヤモリが現れました。ヤモリはカメやヘビなどと同じ爬虫類で、漢字のとおり「家を守る」縁起の良い生き物とされています。

夜行性で、森よりも民家に近い場所を好み、人家の玄関や壁、軒下などに張りついて虫を食べています。ヤモリが壁をはい上がることができるのは、指先の毛と構造に秘密があり、爬虫類のなかでもヤモリにしかできない技です。

ヤモリは、似た名前のイモリ(アカハライモリ)とよく間違えられます。イモリは、カエルやサン

ショウオオなどと同じ両生類で、水田や池など水のあるところに生息しています。かつては井戸の周りでもよく見かけられ、漢字では「井守」と書きます。

名前のうえでは一文字しか変わらないヤモリとイモリですが、このように生息環境は全く違います。

現れたら幸運の前兆といわれているヤモリ。玄関で見つけたのはヤモリ、イモリ、どっちだったっけ?と迷ったときは、「家」を「守」ってくれている方がヤモリと思い出してください。



※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。